

## メソアメリカにおける図像解釈の一試論

～エル・タヒンにおける雷鳴の神の信仰～

加藤 久美子

はじめに

先スペイン期におけるメソアメリカの人々の宇宙観を考察するとき、彼らが残した遺構、遺物やスペイン人記録者の文書などは、欠くことのできない資料である。特に、実際に先スペイン期社会を生活している人々に出会い、その実態を目撃したスペイン人による記録は、確かな情報源としてきわめて有益である。しかし、スペイン人が新大陸へ到達したときには、すでに衰退していた古い都市やセンターも数多く存在しており、中には、その存在自体が知られていないものも多かった。このような古い文明の研究においては、先スペイン期の人々が残した石彫の図像表現や、現在まで伝えられてきた神話が、重要な調査対象となり、これらを解釈することが、彼らの世界観や宇宙観を研究する唯一の方法であると言っても過言ではない。本稿では、1785年までその存在が知られていなかったエル・タヒン (El Tajín) 遺跡から発見された図像を取り上げ、関連した神話の分析からその解釈を試み、先スペイン期におけるメソアメリカ、ことにメキシコ湾岸の人々の宇宙観に関する一つの仮説的解釈を提示するものである。

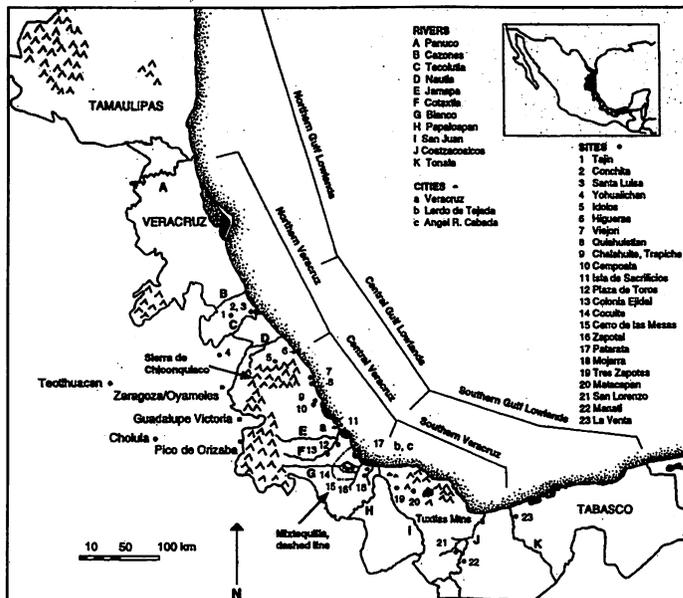


図1 メキシコ湾岸に位置するエル・タヒン：Stark and Arnold, *Olmec to Aztec: settlement patterns in the ancient Gulf lowlands*, 1997, p.4, Fig.1.1.

## 1. エル・タヒン

メキシコ湾岸に位置するエル・タヒンは、西暦紀元頃から西暦1000年頃まで居住され、最盛期の古典期後期（約600～900年）には約2万人の人口を有していたと推測される、この地域の中心的な祭祀センターである（図1）<sup>1</sup>。「エル・タヒン」とは、この地に住むトナカ（Totonaca）族の言葉で《雷鳴、大嵐》を意味する。タヒンを作りあげた人々は、毎年この地域を襲うハリケーンを神格化した、雷鳴の神を中心とする独自の宇宙観を持っていたと考えられている。エル・タヒン遺跡の中心部にある、南球戯場から発見された図像表現の中に、この雷鳴の神が描かれている可能性が指摘されてきた（図2）<sup>2</sup>。



図2 エル・タヒン遺跡の南球戯場（加藤久美子撮影）

球戯場とは、2つの壁状の建造物に挟まれた形で造られた、I字形の空間を指す。南球戯場では、双方の壁のそれぞれの両端と中央に3つ、合わせて6つの異なる図像表現を持ったパネルが発見されている。これらのパネルの図像の中には、いけにえの表現や神々の姿が球戯と密接な関わりをもって描かれていることから、ここで行われた球戯とは単なるスポーツではなく、宗教儀礼であったと推測されている<sup>3</sup>。特に、双方の壁の中央にある2つのパネルには、雷鳴の神が描かれていると指摘される一方で、神聖な酒プルケが重要な要素として描かれていると解釈されている<sup>4</sup>。この見解は、1962年に2つのパネルを発見した<sup>5</sup>メキシコの考古学者ホセ・ガルシア・パジョン（José García Payón）が最初に提唱したもので、プルケ（pulque）が重要な要素として描かれているという彼の仮説はその後支持されてきた。次節では、ガルシア・パジョンの解釈を中心にこれら2つの図像表現を見ていく。

## 2. 南球戯場のパネル

向かい合うように設置されている2つのパネルの図像表現は、鏡状対称の構図を持つ。上部には、顔が一つで体を左右に二つ持つ人物（図3-1、4-1）が描かれた帯状装飾が見られる。この人物は、酒に酔った状態を表していると解釈されている<sup>6</sup>。さらに、絡み合った模様が描かれている下部装飾（図3-2、4-2）は、大地を表現していると言われ、中央部分を左右から挟むように描かれている8本の柱状装飾には、大腿骨（図3-3、4-3）、2つのウサギの頭（図4-4、5-4）、夜と死の象徴であるふくろう（図3-5、4-5）が描かれている。以上の部分に描かれたモチーフは、すでに述べたように南北のパネルではほぼ共通しているが、非常に様式化されているため、その解釈は多岐にわたっている。これらのモチーフに囲まれた中央の部分では、それぞれのパネルで異なる図像表現が展開されており、共通するフレームに縁取られるようにしてそれぞれ固有の主題を持つ部分が表現されているように見える。パネル中央部分の図像表現を見ても、さらに鏡状対象を示すモチーフを見いだすことができる。神殿の横断面（図3-6、4-6）と、中に植物が描かれた三角の部分（図3-7、4-7）である。この植物は、マゲイ（maguey）と呼ばれる多肉性の植物で、プルケの原料となる<sup>7</sup>。ガルシア・パジョンは、この三角の部分（図3-7、4-7）が、プルケの起源を語った神話の中で、その舞台として語られるポポカナルテペトル（Popocanaltépetl）という山を象徴的に描いていると解釈した<sup>8</sup>。

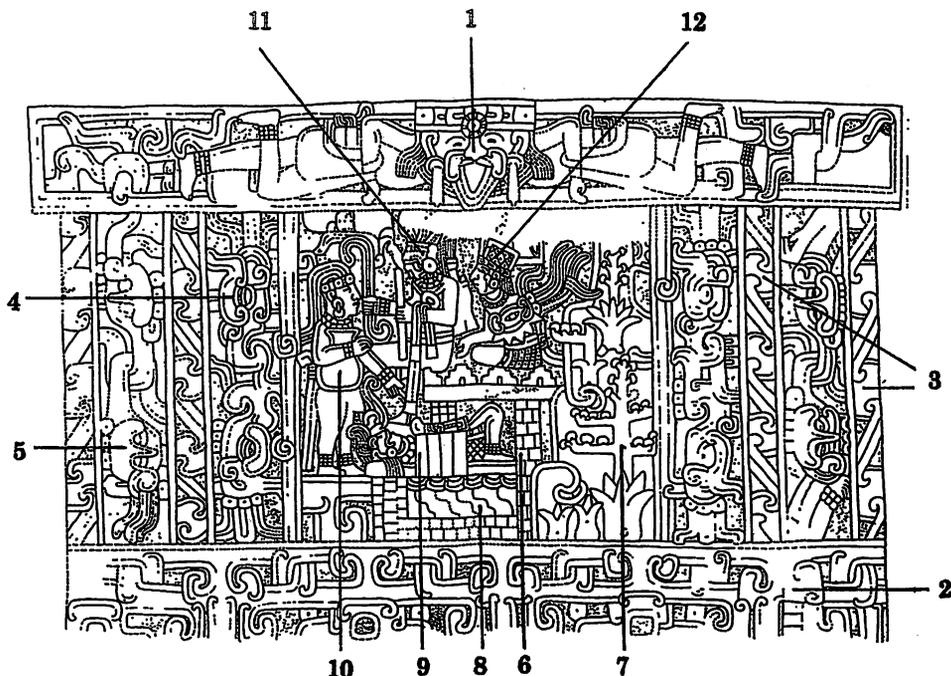


図3 北のパネル：Kampen, *The Sculptures of El Tajin Veracruz, México*, 1972, Fig.25.

北のパネルの中央部分では、神殿の中いっばいに溜まった液体の表現（図3-8）が見られる。神殿の内部には、仰向けに横たわった人物（図3-9）が確認できる。ガルシア・パジョンは、この人物をプルケの神であると解釈している一方で、雷鳴の神の神話との関係性を否定しがたいものとしている。その左側には、この人物（図3-9）を指さしながらつばを抱えて立つ人物（図3-10）がいる。つばは、しばしば神聖な酒プルケを象徴すると解釈されてきた。さらにこの人物は、神殿の上を見上げるように顔をあげており、その視線の先には、口角に描かれた牙から雨の神トラロック（Tlaloc）と解釈される人物（図3-11）が座っている。雨の神の後ろに座るもう一人の人物（図3-12）は、上半身に描かれた巻貝を割ったような形のモチーフから風の神ケツアルコアトル（Quetzalcoatl）だと解釈されている。

北のパネルで満ちていた神殿の液体の表現（図3-8）は、南のパネルで明らかに半減している（図4-10）。神殿の内部には、魚のヘルメットをかぶった人物（図4-11）が現れており、神殿の上には、やはり巻き貝を割ったような形のモチーフを持つことからケツアルコアトルであると解釈される人物（図4-9）が座っている。右上には、擬人化した姿で表されたウサギ（図4-12）が宙に浮いた姿で描かれている。ウサギは、プルケと関連するモチーフであると解釈される。それは、プルケの神オメトチトリ（Ometochtli）が《2のウサギ》という意味を持つからであり、さらに、マゲイの神マヤウエル（Mayahuel）は、400柱のプルケの神であると同時にウサギの母であったと語られることも、ウサギとプルケとの密接な関連性を示唆している<sup>9</sup>。

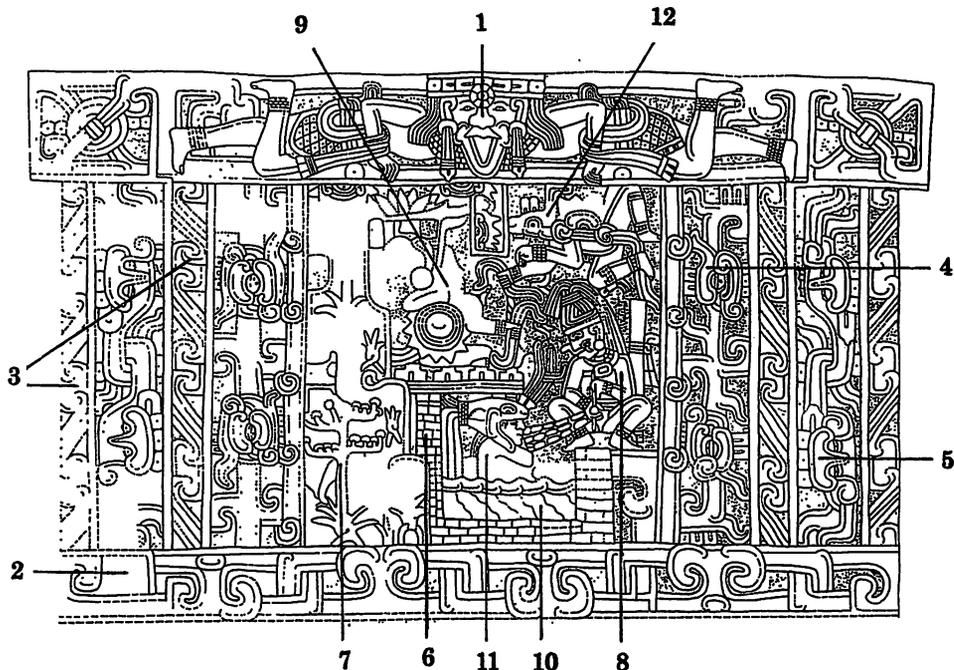


図4 南のパネル：Kampen, *The Sculptures of El Tajin Veracruz, México*, 1972, Fig.24.

以上のように、これら2つのパネルには、つば（図3-10）やウサギの表現（図4-12）や、さらには南北のパネルに共通してマゲイ（図3-7、4-7）が描かれていると解釈されることから、プルケに関連するたくさんの象徴が表現されているのだと指摘されてきた。南のパネルの神殿の正面にしゃがんだ姿で描かれている人物（図4-8）は、やはり口角に描かれた牙から雨の神トラロックであると考えられる。ガルシア・パジョンは、この人物はマゲイから樹液を取り出すための道具を持っていると解釈した<sup>10</sup>。しかし、その後デイビッド・タッグル（David Tuggle）によって、この図像が性器に針を通し放血を行っている人物を表しているのではないかと提案されてからは<sup>11</sup>、タッグルの解釈が一般的に用いられてきている。古代メソアメリカにおいて、人間の血は世界を動かすための重要なエネルギーと考えられ、神々への重要な供物となっていたが、特に、性器は再生をもたらす場所であり、豊穡や永遠の命と関係を持つものと考えられていたため<sup>12</sup>、性器からの放血はことに神聖な行為であった。エル・タヒンの事例において、タッグルは、プルケの表現自体が象徴的に豊穡という概念を持つことにも留意し<sup>13</sup>、南のパネルに描かれる雨の神の自己犠牲によって放たれた血が、液体の中から現れた人物によって受け取られるとき、大地のすべての水が新しく生まれ変わり、マゲイが繁栄することで豊かな収穫が約束されることが表現されているのだと解釈した<sup>14</sup>。一方、ジェフリー・K・ウィルカーソン（Jeffrey K. Wilkerson）は、北のパネルでは、人々が神々へプルケを懇願している場面が表現され、南のパネルでは、神々からの返事として、プルケへと変わる血が、雨の神の自己犠牲によって人々へ齎されているのだと解釈した<sup>15</sup>。このように、プルケや放血を表現していると考えられるモチーフは、豊穡という観念を想起させるものとして、2つのパネルの中心的な要素として注目されてきたのである。

これと並んで、ここで注目する2つのパネルは、エル・タヒンにおいて主要な神であった雷鳴の神の神話と密接な関わりをもっていると指摘されていることも重要である<sup>16</sup>。ベラクルス（Veracruz）地域のいくつかの集落では、雷鳴の神と呼ばれる雷や嵐に関連する超自然的な存在を語る神話や伝承が存在する。エル・タヒン遺跡の南球戯場から発見された図像は、神話の中で語られていた雷鳴の神が、石彫の中に図像として現れた最初の例であると注目された<sup>17</sup>。この時に言及された図像とは、ガルシア・パジョンがプルケの神と解釈した北のパネルの神殿の中に横たわる人物（図3-9）である。雷鳴の神は、神話の中で、海の底で仰向けに横たわり縛り付けられていると語られている。ホセ・ルイス・メルガレッホ・ビバンコ（José Luis Melgarejo Vivanco）は、北のパネルに描かれる人物は、海を連想させる液体の上に仰向けに横たわった姿で描かれており、胴体を縛られていると読み取れるような表現で描かれており、雷鳴の神の神話との関連性が高いと考えたのである<sup>18</sup>。さらに、メルガレッホは、2つのパネルに描かれる神殿は、雷鳴の神が住む海の底に存在する聖域であると解釈し、南北のパネルに描かれる雷鳴の神は自らの聖域にプルケを隠し持ち、人々はこの神が酔っている隙にプルケを盗み出そうとしていると読み取れるかもしれないとも述べている<sup>19</sup>。他方、ロマン・ピニャ・チャン（Román Piña Chan）は、北のパネルでプルケを要求している雷鳴の神は、プルケが用意されなければマゲイを壊しかねない存在であったと解釈している<sup>20</sup>。

これまで、これら2つのパネルの図像に表現されている主題を読み解こうとする試みは、

ブルケを象徴的に表現していると考えられるたくさんのモチーフと、放血という自己犠牲の表現が、象徴的に豊穡を意味していることを、その中心主題として行われてきた。ブルケや放血が、このような象徴的な意味を伴って描かれているということには、これまで多くの研究者が支持してきているように、疑いの余地はないだろう。しかし、ブルケを象徴的に描く表現と、放血という儀礼のモチーフがどのように関わり合っているのかという問題については、いくつかの意見が出されているが、まだ決定的な解釈が提示されるには至っていない。有力な解釈の一例を挙げれば、自己犠牲による血が、水や大地にエネルギーを与え、マゲイが繁栄することによって、豊穡が約束されることを祈願したと考えるものがある<sup>21</sup>。タッグルは、エル・タヒンにおける豊穡祈願の場に「なぜ、新大陸における「生命の柱 (vara de la vida)」であるトウモロコシの代わりに、マゲイが現れているのか」という問題に対する返答の一つとして、生命に対してかけがいのない液体である水や血と、マゲイから作られるブルケが同一視され、マゲイが繁栄することでその他すべての作物の豊穡が約束されると考えられていたのではないかと述べている。しかし、マゲイという植物がエル・タヒンという特定の地域に現れている必然性については言及していない<sup>22</sup>。多肉性植物であるマゲイは、極めて耐乾性が高く比較的栽培が容易であると言われていることに加えて、エル・タヒン遺跡が位置するメキシコ湾岸地域は、高温多湿気候帯に属し、年間降水量1,000mmを越える比較的雨の多い地域である<sup>23</sup>。特に、メキシコ湾に発生する熱帯性低気圧の影響で、夏には非常に強い風と雨を伴う嵐が起こる。この嵐によって洪水が引き起こされるという危険にさらされることも少なくはなく、農作物への被害も深刻であるという。特にこの地域では、多くの雨が降るということだけが豊穡へ結びつくという単純な定式を成り立たせることは難しいと言えるだろう。同時に、特に乾燥に強いといわれるマゲイの繁栄が、すべての豊穡につながると解釈されることにもいささかの疑問が生じる。メルガレッホは、2つのパネルの図像表現の中で、たくさんのマゲイが描かれる部分に象徴される大地と、神殿の中の液体によって連想される水という2つの要素が特に強調されていることに言及して、つぼを持つ人物が、海の底にいる雷鳴の神が持つブルケを盗み出そうとする目的が、果たして「乾いた、しかし既にマゲイが青々と茂り、花を咲かせている大地にわざわざ撒くためだろうか」と疑問を呈している<sup>24</sup>。ブルケの表現と雨の神の自己犠牲という表現が同時に描かれていることを説明しようとして主張された豊穡祈願という解釈は、今、考え直すべき時に来ているのではなかろうか。

改めて注目すべきなのは、雷鳴の神の神話と密接に関連していると示唆された図像である。これまで、2つのパネルに雷鳴の神が表されているとしてきた解釈は、非常に曖昧であったと言わざるを得ない。このことは、ブルケや放血などのモチーフに関わる象徴的な意味がその他のモチーフとの関連の中で熱心に考察されてきたのに比べて、雷鳴の神に関連する表現や神話の背景についての十分な分析が行われてこなかったためであるように思われる。端的に言えば、雷鳴の神と、これまで常に重要な要素であると強調されてきたブルケのモチーフとの接点が不明瞭であり、これら2つの象徴表現の意味論的關係が考察されてこなかったと考えられる。雷鳴の神はタヒンの主要神格であり、ブルケもまた、球戯場で表現され

るという点で、独特な要素である。タヒンにおける図像解釈を進めるためには、これら2つの表現の必然的関連性が検討されなければならないのである。

### 3. ベラクルス地域に広がる雷鳴の神の信仰

ベラクルス州に居住するトトナカ族に関する研究を行ったロベルト・ウィリアムズ・ガルシア (Roberto Williams García) は、エル・タヒン遺跡周辺に住むトトナカ族のある老人から、「年老いた雷鳴の神 (El Trueno Viejo)」と題された話を記録した<sup>25</sup>。神話は、こう語る。

ある一人の親のない少年が山をさまよっていると、宙に浮き、ひとりでにまきを切っている斧を見た。切られたまきは、やはりひとりでに山を転がり落ち、壁龕の神殿に入っていった。少年はこのまきについて行き、壁龕の神殿までたどり着くと、そこには、12人のタヒンと呼ばれる老人が住んでいた。彼らは、この少年に、忠告には従うように言い、彼の世話をすることにした。12人の老人たちが仕事に出かけるときは、かばんからブーツ、ケープ、剣を取り出す。雲の上で、マントを翻すことで風を、ブーツを踏み鳴らすことで雷鳴を、剣を抜くことで稲妻を作り出すのが彼らの仕事だった。ある日、老人たちが留守をしている間、この少年はかばんの中から最も威力のある服、つまり嵐の服を取り出し、それを身に付けて雲の上でふざけ始めた。するとたちまち恐ろしい嵐が起り、地上を破壊し始めた。それに気づいた12人の老人たちはこの孤児を捕まえ雲の上に投げつけたが、孤児は簡単に雲から滑り落ちてしまった。そこで、彼らはこの孤児を海の底まで連れて行き、そこに縛り付け、年老いるまでそのままにした。それ以来、海の底から低く唸るような大きな声が聞こえる。これは、彼が、サン・フアン (San Juan) の祝日はいつ来るのかと聞いているためである。しかし、老人たちは彼に正確な日を告げることはない。なぜなら、それを知られてしまうと、大洪水が起きることになるからだ。

これは、「年老いた雷鳴の神」と題された神話の大筋である。後半部分は、明らかにキリスト教の影響を示しており、少年と聖人サン・フアンの同一視が見られる。ウィリアムズによれば、タヒンと呼ばれる12人の老人達は雷鳴の神々である<sup>26</sup>。神々から嵐を起こす力を持つ服を盗み、地上に嵐を引き起こすという表現からは、この少年が、雷ないし嵐と密接に関わる神性を帯びた存在であると解釈される<sup>27</sup>。1947年、イサベル・ケリー (Isabel Kelly) によって始められたトトナカ文化研究<sup>28</sup>が進む中で明らかになった雷鳴の神の信仰は、年老いた雷鳴の神の神話に関連した雷や嵐の属性を持つ超自然的な存在を語る様々な神話・伝承の形を取って、ベラクルス州の様々な集落で確認されることになった。ウィリアムズは、1951年にベラクルス州中部のハラパ (Xalapa) 北方に位置するランデロ・イ・コス (Landeroy Cos) に住むトトナカ族の調査を行い、民間伝承を収集した際に、この地域で語られるトゥモロコシを守る超自然的な存在の話に遭遇した<sup>29</sup>。この超自然的な存在の声は、6月頃、東の方角より聞こえはじめ、9月まで続く。「チャック・モール (Chac Mool) の姿勢」、すな

わち、膝を立てて仰向けに横たわり頭をかすかに持ち上げた姿で海の底におり、世界中に雨を降らせて雲を作る。この神は、葉巻を吸い、その煙を一吹きする度に雷鳴を作り出す。

エル・タヒン遺跡がある海岸部から270km以上南下したところに位置するランデロ・イ・コスでのこの発見は、非常に驚くべきものであったとウィリアムズは述べている。なぜなら、この町に住むトトナカ族と、エル・タヒン遺跡からほど近いパパントラに住むトトナカ族は、同一言語を話す集団であるにも拘わらず、別の言語集団を間に挟むことによって、互いに隔離されてきたからである。それは、この地域に何百年にもわたって異なる言語集団が入り込んできた結果であった。このように地理的に隔絶していながらも、類似性の高い神話を共有しているという事実は、それらの祖形となった神話が2集団の隔絶以前に起源をもつ古いものであったことが考えられるのである。さらに、ウィリアムズは、ランデロ・イ・コスでの調査の翌年、エル・タヒン遺跡の西方に位置するピサフローレス (Pisaflores) に居住する、テペワ (Tepehua) と呼ばれるトトナカ語を話す人々を対象に調査を行った。ここでも、サン・ファン、またはシニ (Sini) と呼ばれる年老いた雷鳴の神が、毎年大洪水を起こしたので、これに困り果てた人々がこの神を騙して海の底へ落としてしまうという、前2者と類似した話が存在している。ウィリアムズは、未発表ではあるが、雷鳴の神の神話と非常によく似た話がほかにもあることを語っている<sup>30</sup>。

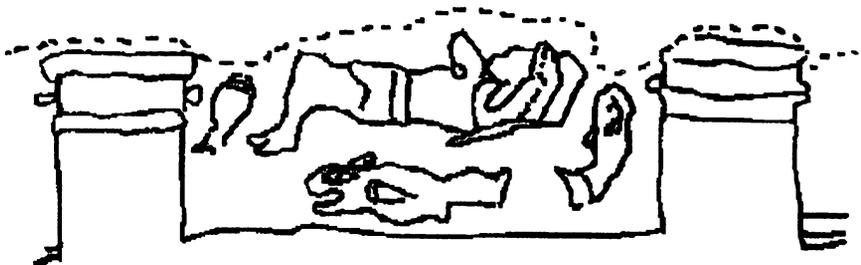


図5 ラス・イゲラス遺跡に残る壁画：  
ハラバ人類学博物館 (Museo de Antropología de Xalapa) (加藤久美子撮影/スケッチ)

ベラクルス州のいくつかの地域で確認された雷鳴の神は、1962年にエル・タヒン遺跡から見つかった石彫の中に図像として姿を現した。ガルシア・パジョンによって発見された、南球戯場の北のパネルに描かれた図像の中に、雷鳴の神の神話と関連性が高いものがあることが示唆されたのである<sup>31</sup>。すなわち、神殿の中に溜まった液体は海を表現し、チャックモールの姿勢で横たわる人物は、胴体に描かれた4本のベルトのようなもので縛り付けられていると読み解かれた。このパネルの発見によって、現代のベラクルス州に住む人々によって語られる雷鳴の神の神話は、その起源を先スペイン期まで遡る可能性が高いことが示されたと言える。さらに、1970年に、メキシコ湾岸のベガ・デ・アラトーレ (Vega de Alatorre) に位置するラス・イゲーラス (Las Higueras) 遺跡で見つかった壁画 (図5) は、さらにその可能性を高めるものだった。古典期後期 (600～900年頃) のものと考えられる<sup>32</sup>この壁画に描かれた図像の一つは、2つの柱に挟まれた空間に仰向けに浮かぶ人物と、それを囲む3匹の魚を描くものである。魚のモチーフによって水中であると解釈される場面に、膝を曲げた仰向けの姿勢で描かれているこの人物は、雷鳴の神の神話に語られる超自然的な存在を描いているものと解釈されている<sup>33</sup>。先スペイン期に属する図像の中に、雷鳴の神と密接に関わる表現が発見されたことによって、ベラクルス州で現在まで語られる雷鳴の神の神話の起源は、非常に古く、そして、メキシコ湾岸地域の広い範囲に分布していたと推測されるようになった<sup>34</sup>。

ベラクルス州の各地で確認されてきた雷鳴の神の神話は、メキシコ湾岸地域に特有の気候であるハリケーンに関わる信仰に基づいたものであろうと考えられている<sup>35</sup>。毎年メキシコ湾やカリブ海、北大西洋南部などで、6月頃から発生する熱帯性低気圧は、8月に入るとさらにハリケーンに成長することがある。一度ハリケーンが発生すればその被害は甚大である。現在でも、洪水や家屋の倒壊によって多くの犠牲者や行方不明者が出るし、道路や水道・電気などを供給するインフラ施設が破壊されたりもする。作物や家畜などに対する被害も深刻で、その後の衛生環境の悪化によって伝染病が拡大する恐れもある。このように、ハリケーンは、自然の大災害として恐れられている<sup>36</sup>。神話に語られる、激しい雷や雨を司り地上に大嵐を巻き起こす雷鳴の神は、この地域を襲う恐ろしいハリケーンを象徴していたと言ってよいだろう。古代の人々は、日常生活の秩序を乱し、時に人の命を奪いかねない存在であったハリケーンを、神格化し畏怖の念を持っていたであろうことが推測できる。

しかし、地上に混乱と被害をもたらす雷や嵐の神は、他方、悪魔を倒す英雄として語られることもある。トトナカパン (Totonacapan) 地域で記録された伝承の中に、「悪魔と稲妻 (Los Diablos y El Rayo)」という話がある<sup>37</sup>。

「稲妻は、神が地上に潜む悪魔を倒したかどうかを見るために落ちる。稲妻が草むらに落ちて、草が枯れていなければそれは悪魔がいるせいである。それゆえ、悪魔が死ぬまで二度三度と稲妻が落ちるたびに神は地上に戻ってくる。人々はいくつもの稲妻が落ちているときは決して家の外には出ないので、誰も悪魔を見たことはない。」

(Hernández,1993,pp.53-57)

この伝承が紹介されている本には、編集を行った著者による次のコメントが添えられている。「稲妻は、凄まじい力を持っているけれども、悪の力ではない。おそらく、この事例は、タヒンに関して伝えられる神話と関連しているのだろう<sup>38</sup>。」このように雷が人々を助ける者としての姿で語られる背景には、ハリケーンが豊富な雨をもたらし、落雷が大地を肥沃にするという生産的な側面も、同時に認識されていたことによるのかもしれない<sup>39</sup>。この地方では、熱帯性低気圧やハリケーンが夏季に多雨をもたらす大きな要因であり、さらに比較的雨の少なくなる時期に降る雨も、大部分が、熱帯性低気圧による嵐に付随する現象であると言われる。

嵐やハリケーンが生産的な側面をもっているとする観念は、雷鳴の神の神話と密接に関連するいくつかの話が、豊穡に関連性をもっていると読み取れることから確認できる。1943年、ジョージ・M・フォスター (George M. Foster) は、ベラクルス南部の町サン・ペドロ・ソテアパン (San Pedro Soteapan) における調査で、オムシュック (Homshuk) と呼ばれるトウモロコシの神が、嵐の神と戦うことを語る、ポポルーカ (Popolucan) 族の神話を採集した<sup>40</sup>。ベラクルスにおける嵐や雷に関連した超自然的な存在は、時に、片足しかもたないか、または片足しか使わないという特徴を持って語られるという。ウィリアムズは、このポポルーカ族の話には片足であるという特徴が明確に現れていると言及している<sup>41</sup>。この話の中で、嵐の神は、トウモロコシの神がゆるするハンモックによじ登ることに成功する。しかし、このハンモックはトウモロコシの神によってあらかじめ壊れるように細工されていたため、その策略通り、嵐の神はハンモックごと下の海へ落ちてしまう。片足を骨折しながらも何とか助かった嵐の神は、海岸までたどり着くなりトウモロコシの神へ謝罪し、乾燥している時期にはトウモロコシの神の頭に水を撒くことを申し出た。それは、6月から7月に起こることだった。そのときから、嵐は、人々のためにトウモロコシの畑 —ミルパ (milpa) — を潤すのだと言われる。

嵐が齎す多雨がトウモロコシ栽培に必要な水を供給することを語るポポルーカ族の神話は、嵐の神の生産的な側面を強調している<sup>42</sup>。比較的雨が多いこの地域でも、6月から7月にかけては、トウモロコシの成長にとって十分な水が確保されにくく、ハリケーンが発生する8月でさえ、作物栽培にとっては深刻な日照りが続くことがあるという。高温で乾燥した天候は、特に7月下旬から9月上旬に行われるトウモロコシの受粉を妨げる要因となる<sup>43</sup>。ウィリアムズは、ベラクルス湾岸地域の農耕社会の人々が嵐に対してもっている信仰は、ハリケーンが多雨を伴って到来する8月に、トウモロコシの受粉が行われるという事情に起源を持つのもかもしれないと推測している。そして、「ミルパのために、またさらに遅れて播種する作物のために、ハリケーンが持つ固有の危険性を同時に伴いながらも、ハリケーンが齎す降雨はこれ以上ない期待であった」とも述べている<sup>44</sup>。5月の終わらないし6月の初めに始まる雨季の到来を告げる熱帯性低気圧や、主に8月頃に出現するハリケーンが齎す嵐は、凄まじい力を持つと恐れられる一方で、ベラクルスの農耕社会において重要な雨を齎すという意味で、必要不可欠な存在であるといえる。

雷鳴の神とは、単に人々に破壊をもたらす悪ではなく、その絶大な力ゆえに時に破壊をも

たらずとしても、時に恵みをもたらす神であった<sup>45</sup>。このような雷鳴の神に対する信仰は、嵐がもつ破壊的な力を単に退治してしまうことを望む、というだけのものではなかったと考えられる。猛り狂う行き過ぎた力は、一度鎮められなければならないが、その同じ力は、新たな、また、適度な雨を導くために、蘇らせなければならない。つまり、雷鳴の神への信仰の根底には、過剰な力をもつ神を滅ぼし、統御された力をもつ神としての蘇生がそのテーマとしてあること、一言で言えば、死と再生の観念があることを理解しなければならない。

#### 4. パネルの解釈

改めて、ここで問題とする2つのパネルの図像表現に注目するとき、前章で検討した雷鳴の神が持つ、破壊性と生産性という二元的な性格は、ガルシア・パジョンが、2つのパネルに共通する上部の帯状装飾に描かれる人物のモチーフ（図3-1、4-1）に二元論的性格を認めたことを思い起こさせる。ガルシア・パジョンは、中央の顔から左右に延びた2つの肢体は、男と女、昼と夜、乾燥と湿潤といったような対称的な概念を象徴的に表すために二分化された特徴的な表現であると述べている<sup>46</sup>。この人物は、片足を休めながら踊っているとも解釈されるが<sup>47</sup>、このモチーフと極めてよく似た表現を、南球戯場の北方に位置する北球戯場にも見出すことができる（図6）。北球戯場は、南球戯場に比べて小規模ではあるが、両側の壁に6つのパネルが設置されているなど、南球戯場とよく似た構造を持っている<sup>48</sup>。北球戯場の北西のパネルには、南球戯場の中央のパネルが持つような、上部の帯状装飾部分が見られる。この部分には、正面を向いてうつぶせに横たわった片足の人物が描かれている。この人物については、一つ足（El Uno Pierna）とも呼ばれる雷または嵐の神との関連性が指摘されている<sup>49</sup>。

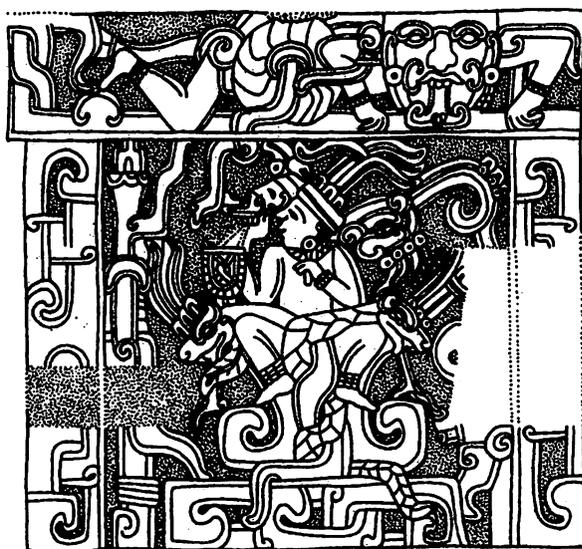


図6 北球戯場の北西のパネル：Piña Chan, 1999,p.44, Fig. II.9.

2つのパネルの図像表現の中でさらに注目したいのは、南北のパネルで共通する神殿の横断面の表現である。エル・タヒンでは、水利施設<sup>50</sup>が高度に発展していたという可能性を重視するハイメ・コルテス (Jaime Cortéz) は、南球劇場に見られる液体を湛えた神殿の図像に類似した外観を持つ、グラン・シカルコリウキ (Gran Xicalcolihqui) と呼ばれる建造物複合に注目している<sup>51</sup>。南球劇場の北東に位置するこの建造物複合は、コルテスによれば「輪切りにしたカタツムリ、または巨大な寸法の雷紋や渦巻きのような」平面プランを示している (図7)。グラン・シカルコリウキ建造物複合は、その建築学的な構造と地形的な条件から、流れてきた水が一定量溜まるように設計されており<sup>52</sup>、生活用水を確保するための雨水槽としての機能を果たしていた時期があったと考えられている。コルテスは、グラン・シカルコリウキ建造物複合が持つこのような建築学的な特徴が、南球劇場の2つのパネルに見られる神殿の横断面の表現が持つ特徴と酷似していると指摘し、液体を内部に有する神殿のモチーフは、雨の神によって充填された水を湛える泉のような存在として描かれているのではないかと考えた<sup>53</sup>。

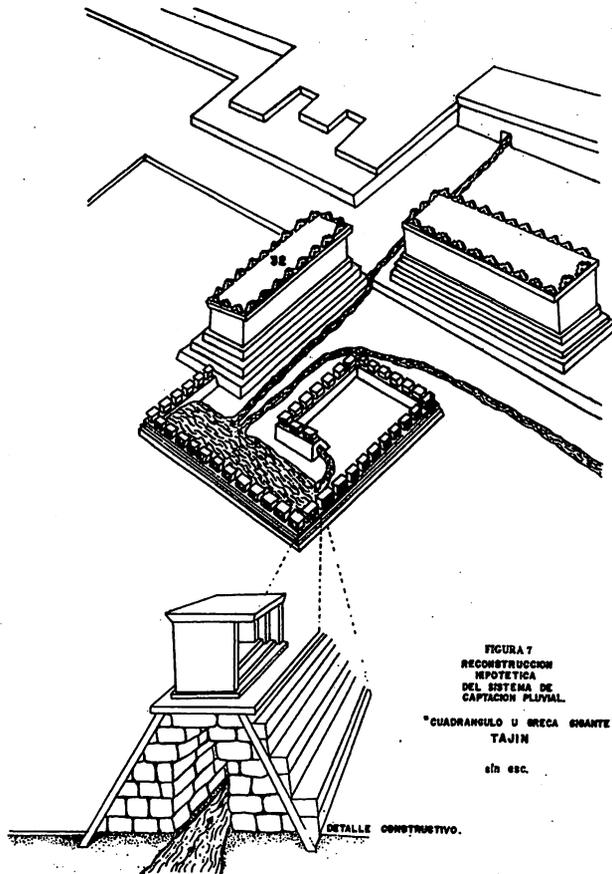


図7 グラン・シカルコリウキ建造物複合：Cortéz,1989,p.185,Fig.7.

神殿の内部に溜まっているように表現されている液体（図3-8、4-10）は、南北のパネルで水位が異なっていることに気付く。コルテスが示唆するように、これらの神殿の図が、雨水槽として機能していた施設と関係をもつものとして解釈するとき、水位の違いとは、それぞれのパネルに描かれる場面の時期の相違を表していると考えられるように思われる。つまり、神殿の内部の液体がぎりぎりまで満ちている—コルテスによれば、溢れていると読み取れる—北のパネル（図3）は、雨が多く降る時期を表現しており、一方で神殿の中に描かれる液体が明らかに半減している南のパネル（図4）は、雨が比較的少なくなる時期を表現していると解釈できるだろう。言い換えるならば、多雨を伴うハリケーンが活発に活動する時期と、その活動が弱まっている時期に相応するものと考えられることができる。南球戯場の中央の2つのパネルは、雷鳴の神が持つ2つの側面—自然災害を齎す破壊的な存在と、多雨を齎す生産的な存在—をそれぞれ描いているのではないかと推測できるのである。

北のパネルに描かれた神殿から溢れ出る液体のように、地域一体を襲う洪水を引き起こし、すべてを破壊しかねないハリケーンに恐怖を覚えた人々は、その荒れ狂う力を鎮めようと願ったはずだ。つまり、チャックモールの姿勢をとる雷鳴の神が描かれた北のパネルでは、雷鳴の神を捕らえ鎮めるための儀礼が行われている様子を描いている、と解釈を発展させることができる。しかし、この神を完全に退治してしまえば、雨を齎す存在自体を消滅させてしまうことになる。ここで思い出されるのが、プルケの神オメトチトリの神話で語られる死と再生の話である。ルイス・スペンス（Lewis Spence）は、1579年にワステカ（Huasteca）地域で採録されたオメトチトリの神話に言及している<sup>54</sup>。それによれば、オメトチトリは、テスカトリポカ（Tezcatlipoca）によって自らが殺されることを予め知っていたが、その死を受け入れる。しかし、オメトチトリはこの死によって永遠の命を得ると言われる。さらに、もしもこの神が死ななければ、酒を飲んだ者は全員が死ぬ運命にあっただろうと、逆説的な語りさえなされている。オメトチトリの死とは、消滅を言うのではない。それは、酒によって寝込むことを指し、後に生まれただのような元気な姿に戻って目覚めることを約束しているのである。この神話において語られる死と再生は、プルケによる酩酊と覚醒を示しており、過剰な状態（力）の死と、適度な状態（力）の再生を象徴的に語っていると考えられることができる。

雷鳴の神の死と再生、つまり嵐という破壊的な力の死と、農耕に益する天水という適度な力の再生を願っていた人々は、その儀礼を、同じ象徴と意味をもったプルケとオメトチトリの神話に重ね合わせたのではないだろうか。つまり、北のパネルでは、つばを持つ人物（図3-10）から捧げ物のプルケを受け取った雷鳴の神（図3-9）が、この酒に酔って眠り込んだことで、破壊者としての「死」を迎えたことを描いているものと解釈したい。おそらく、プルケを飲んで「死んだ」（眠り込んだ）雷鳴の神は、その後、適度な生産力をもつ者として「再生する」（目覚める）はずだと信じられていたのではないかと思われる。

ウィリアムズが述べているように、ハリケーンが齎す雨はベラクルス地域における農耕社会にとって必要不可欠であった。プルケによって鎮められた雷鳴の神は、ハリケーンの時期を過ぎると、その力を次第に弱めていく。南のパネルで半減している神殿の中の液体は、雨

が減少している状況を表している。人々は、この神が本当に再生するかどうか、不安を感じていたのかもしれない。メルガレツホは、半減した液体の中から上半身を覗かせている人物(図4-11)を、海の底にある自らの聖域に住む雷鳴の神だと解釈した<sup>55</sup>。この人物が魚のヘルメットをかぶっているのは、ラス・イゲーラス遺跡の壁画に描かれた人物(図5)が魚とともに描かれていることと同義であろう。海の底にいる雷鳴の神を表現している可能性は高い。南のパネルのこの人物(図4-11)は、その右側でしゃがみこむ雨の神トラロック(図4-8)の自己犠牲によって放たれた血を浴びている。メルガレツホは、これを、雷鳴の神が、恵み深くエネルギーに満ちた血を、トラロックから与えられている場面であると解釈している<sup>56</sup>。つまり、南のパネルでは、神殿の中の半減した液体が象徴するように、一時は大洪水を起こしかねないと恐れられたような凄まじい力をもはや失ってしまった雷鳴の神へ、豊穡を導く適度な雨をもたらすよう、エネルギーを捧げている場面を描いていると解釈できるだろう。

## 5. 結論

本稿は、エル・タヒン遺跡、南の球戯場の側壁に設けられた6枚のパネルの内、各側壁の中央に設置された2枚のパネルについて、その図像表現の意味を明らかにしようとしてきた。これまでは、プルケの表現に関わる象徴性を重視し、また、雨の神の自己犠牲というテーマをそれとの関連の上で解釈しながら、マゲイの豊穡祈願の儀礼を表現するものとして解釈が行われてきた。本稿では、この見解を再検討し、エル・タヒンにおいて重要な神であった雷鳴の神の表現を同時に読み取ることで、新たな解釈の提示を試みた。プルケに関わる儀礼は、パネルの主題ではなく、むしろ、雷鳴の神を統御する儀礼が、プルケの神話に依拠しつつ行われ、それがパネルに表現されたのではないかという可能性を指摘したのである。プルケに関わるオメトトリの神話は、過剰な力の死と、適度な力の再生を象徴的に表現していると分析できるのであって、雷鳴の神が持つ破壊と生産という二元的な側面を統御する儀礼が、この神話に依拠しながら、あるいはこの神話と同期をとりながら、表現されていたという見解を提示した。このことは、これまで誰も明確に言及してこなかったことである。プルケおよび自己犠牲の表現と雷鳴の神の表現との意味論的關係を明らかにする端緒となれば、幸いである。

最後に、本稿で取り上げた2つの図像は、球戯場という場所に描かれていたことを忘れてはならない。雷鳴の神の死と再生に関わる儀礼が、球戯とどのような必然的關係をもっていたのかという問題を明らかにすることが、今後の重要な課題である。

\*                     \*                     \*

松本亮三先生には、幾度も原稿に目を通していただき、貴重なご教示をたくさん頂いた。また、図版作成にあたっては、須藤大輝氏にご協力をいただいた。最後にお礼申し上げたい。

1 エル・タヒンに関する概説は、Payón García, José, *La Ciudad arqueología del Tajín*, Contribución de la Universidad Veracruzana a la V Reunión de la Mesa redonda de Antropología, Xalapa,1951; Payón García, José, “El Tajín, Descripción y Comentarios”, *Universidad Veracruzana* vol.3,1954; Quijada Soto, Miguel Angel, *El Tajín : Guía esotérica*, Derechos reservados Miguel Angel Quijada Soto, Coatepec, 2000などを参照した。

2 Payón García, José, “Quienes construyeron El Tajín y resultados de las últimas exploraciones de la temporada 1961-1962”, *La Palabras y el Hombre*, vol.1, núm28,1963,pp.243-252; Melgarejo Vivanco, José Luis, “Los relieve del Juego de Pelota Sur, en el Tajin”, *La Palabra y el Hombre*, nueva época, número extraordinario (septiembre),1974,pp.154-156.

3 Wilkerson, Jeffrey K., “And Then They Were Sacrificed : The Ritual Ballgame of Northeastern Mesoamerica Through Time and Space”, *The Mesoamerican Ballgame*, edited by Vernon L.Scarborough and David R.Wilcox, The University of Arizona Press, Tucson, 1999,pp.51-52.

4 2つのパネルにおけるガルシア・パジョンの解釈は、García Payón, 1963,op.cit.pp.243-252; García Payón, “La ciudad sagrada de hurakán”, *Los enigmas del Tajín*, Colección científica arqueología 3,SEP, México, 1973,pp.31-57による。

5 既に双方の壁の両端から4つのパネルが見つかった南球戯場の調査で、ガルシア・パジョンは、双方の壁の中央に新たに2つのパネルを発見した。2つのパネルの大きさの平均は、高さ1.62m、幅2.57mと報告された。Payón García, José, “Hallazgo de otros tableros en el centro de Juego de Pelota Sur de El Tajín”, *Boletín INAH* , vol.8, junio,1962,pp.9-10; García Payón,1963,op.cit. pp.243-252.

6 2つのパネルの図像解釈についてのガルシア・パジョンの見解は、García Payón, 1963,op.cit.pp.243-252;García Payón,1973, op.cit.pp.31-57を参照した。

7 マゲイは、和名でリュウゼツラン（竜舌蘭）と呼ばれ、北アメリカ南西部の原産で、北アメリカ南部から南アメリカの熱帯地域に分布し、特に乾燥地域に特徴的な植物である。根茎から長さ1～2mの多肉質の葉を密なロゼット状に10～25枚出す。植物体が適当な大きさに成長すると、高さ8～16mの太い花茎を出し、緑がかった黄色の花を密な円錐花序につける。朝日新聞社、【植物の世界 9 種子植物】、1997年、274頁。

8 ワステカ地方に伝わる、ブルケの起源の話にちなんだ儀式を語った話には、こうある。泡の山という意味のポポカナルテペトルと呼ばれる場所で、ブルケを発見した後、その発見者たちはそこで祝祭の準備を始めた。招待された老人たちの前に、4杯の新しい酒が置かれた。4杯分とは、新しく出来上がった酒の良さを公表するのに必要な量であると考えられた。さらにこの酒は、出席している位の高い人への無礼がないよう、祭りの中で振舞われた。García Payón,1973,op.cit.p.45.

9 Tuggle, H. David, “El significado del sangrado en Mesoamerica: la evidencia de El Tajín”, *Boletín INAH*, núm42,1970,p.37.

10 García Payón,1963,op.cit.pp.248-249; García Payón,1973,op.cit.p.35.

- 11 Tuggle,op.cit.pp.33-35.
- 12 Tuggle, op.cit.pp.35-36.
- 13 タッグルは、アステカの人々によって、400柱のプルケの神々の母であるマゲイの神が豊穡の神として崇拜されていたこと挙げている。Tuggle,op.cit.p.37.
- 14 Tuggle,op.cit.p.36.
- 15 Wilkerson,op.cit.pp.64-66.
- 16 Payón,1963,op.cit.pp.243-252;Melgarejo,op.cit.pp.154-156.
- 17 Williams García,Roberto, “Diversos nombres de la deidad Tajín”, *La Palabras y el Hombre*, núm 87,1993,p.8.
- 18 Melgarejo,op.cit.pp.154-156.
- 19 Melgarejo,op.cit.pp.154-156,158-160.
- 20 Piña Chan, Róman,*Tajín: La ciudad del dios huracán*, Fondo de Cultura Económica,1999,pp.75-76.
- 21 たとえば、Tuggle,op.cit.pp.33-38.
- 22 Tuggle,op.cit.p.37.
- 23 エル・タヒン遺跡が位置する地域の気候については、Alfonso Avilés, Francisco (coord.) , *Veracruz Monografía estatal*,Consejo Nacional Técnico de la Educación,México,1996,pp.30-33; Piña,Chan,op.cit.pp.16-17; Zaleta,Leonardo,*Postales de Papantla*,Amatl Litográfica,Xalapa,2001, pp.145-146を参照した。
- 24 Melgarejo,op.cit.p.156.
- 25 Williams García, Roberto, “Trueno Viejo=Huracán=Chac Mool”, *Revista Tlatoani ENAH*, núm 8-9,1954,p.77.
- 26 Williams García Roberto, “Trueno=Huracán=Chac Mool”,*Vida Veracruzana*, núm 42, añoIII, nueva época,2003,pp.6-7には、1954年に発表された同名の論文の要約と「年老いた雷鳴の神」の神話を分析した簡潔なコメントが加えられている。
- 27 *ibid*,p.6.
- 28 Kelly,Isabel and Angel Palerm,*The Tajín Totonac,Part1;History substance, shelter and technology*, Smithsonian Institution, Institute of Social Anthropology Publication13, Washington, 1952.
- 29 ウィリアムスによるベラクルス州ランデロ・イ・コスおよびピサフローレスの調査については、Williams,1993,op.cit.pp.5-8を参照した。
- 30 ウィリアムスは、シエラ・デ・プエブラ (Sierra de Puebla) にあるサン・マルコス・エルソチトラン (San Marcos Elxochitlan) に居住するトトナカ族に対する調査をケリーとともにに行ったアンヘル・パレム (Ángel Palerm) もまた、この地域に年老いた雷鳴の神の神話が存在したことを示唆したと述べている。Williams,1993,op.cit.pp.7-8.
- 31 Payón,1963,op.cit.pp.243-252; Melgarejo,op.cit.pp.154-156.
- 32 ハラパ人類学博物館の解釈を参照した。

- 33 Williams,1993,op.cit.p.8.
- 34 Williams, 1993,op.cit.pp.7-8.
- 35 Williams, 1993,op.cit.pp.5-7.
- 36 国立ハリケーンセンター (National Hurricane Center) の公式発表によれば、2003年度のハリケーンシーズン (6月1日から11月30日) に発生した風速39マイル以上の熱帯性暴風雨は14個で、そのうちハリケーンに成長したものは7個、さらに風速111マイル以上の大型ハリケーンになったものは3個であった。フロリダ西海岸を含むメキシコ湾岸へ大型ハリケーンの20世紀における上陸率はおよそ30%である。National Oceanic and Atmospheric Administration, <http://www.noaaneews.noaa.gov/stories2003/s2131.htm>, National Hurricane Center, 2003/12/26.
- 37 Hernández Palacios, Esther (coord.) , *Totonacapan; Mitos y Leyendas*, Universidad Veracruzana, Xalapa, 1993, pp.53-57.
- 38 *ibid*, p.55.
- 39 さらに、メキシコ湾岸では、毎年あまり深刻でない洪水によって沈殿物である沖積土が運ばれてくる地域が、非常に肥沃な土壌を有し、作物栽培に適しているといわれる。Sanders, William T., "Cultural Ecology and Settlement Patterns of the Gulf coast", *Archaeology of Southern Mesoamerica part2*, University of Texas Press, 1971, pp.543-544.
- 40 Foster, Geroge M., *Sierra Popoluca folklore and beliefs*, University of California, Berkeley, 1945, p.194.
- 41 Williams, 2003, op.cit. p.6.
- 42 ベラクルスの農耕社会における嵐の神の信仰については、Williams, 1993, op.cit. pp.6-7を参照した。
- 43 トウモロコシの花粉は、気温21℃～34℃で湿度が30～70%のとき、受精能力はほぼ24時間保たれるが、気温が35℃を超えると1、2時間で死滅する。湿度が低下すると、雌しべの柱頭の粘り気が失われ、受粉しにくくなるし、雌しべの受精能力も無くなり、受粉したとしても受精しない。さらに、トウモロコシは風媒による他家受粉を本体とするものの、強風による倒伏に極めて弱く、特に受粉期の倒伏は受粉を妨げる要因となる。野口弥吉監修、『農学大事典』、養賢堂、1977年 (訂正補足版)、487、926頁；農業技術協会、『野菜畑作技術事典』、農林省農林水産技術会議事務局編、1973年、46～49頁。
- 44 Williams, 1954, op.cit. p.77.
- 45 ピニャ・チャンは、相反する二つの側面をもつエル・タヒンにおける嵐の神と、二元的な性格をもつと考えられる金星またはケツアルコアトルとの密接な関連を示唆している Piñachan, op.cit. pp.43-54, pp.63-65, pp.73-76.
- 46 García Payón, 1963, op.cit. pp.249-250.
- 47 García Payón, 1963, op.cit. p.249
- 48 Kampen, Michael Edwin, *The Sculptures of el Tajín*, University of Florida Press, Gainesville, 1972, pp.10-11.

49 Piña chan,op.cit.p.113; Ladrón de Guevara, Sara, *Imagen y pensamiento en El Tajín*, Universidad Veracruzana, INAH,México,1999,pp.103-104.

50 エル・タヒン遺跡の水路や雨水溜めの存在は、ガルシア・パジョンによる1961年の調査などから明らかとなっている。1984年から始まったエル・タヒン遺跡の調査に参加していたコルテスは、エル・タヒンにおける雨水の排水機能を持った水路が創造された背景について、「重要な建築物郡の大部分が集中している地域の心土が不透水性であるために、帯水層が地表まで上昇するときに高まる洪水の危険にさらされる地域の、自然的、人工的な地理的制約へ対応するためである」と述べている。Cortéz Hernández, Jaime, “Elemento para un intento de interpretación del desarrollo hidráulico del Tajín”, *Arqueología INAH*, vol.5,1989,p.137.

51 エル・タヒンの水利施設に関する記述とコルテスの見解は、ibid,pp.181-182を参照した。

52 エル・タヒン遺跡は、東方と西方にある2つの台地の斜面に挟まれた盆地に位置する。主要な建造物が集中する中心地区は、北から南への自然な傾斜を持つため、降った雨水はすべて南方に広がる平野へ排水される仕組みになっている。遺跡北部の小高い丘にはタヒン・チコ (Tajín Chico) と呼ばれる建造物群が存在し、この地区の南東部、つまりタヒン・チコと近接しているものの、標高がかなり低くなっている地域に、グラン・シカルコリウキは作られている。渦巻状の構造を持つグラン・シカルコリウキは、北方の壁が一部あいているため、自然の傾斜を持つ地形によって北方から流れてきた雨水を効率的に受け止めることができたと推測されている。この渦巻き状の壁に囲まれた内側の地層は、地表から50cmまでの深さに腐植土層を示し、その下には約2mの深さまで続く沖積土の層が見られ、さらには磨耗した砂利や小さな石が見つかっている。このような地層の構成は、同じ標高を持つその他の地域でも見られるが、2mの厚さに堆積した沖積土の層はグラン・シカルコリウキ内部のみで見られる特徴である。これらのことから、グラン・シカルコリウキが構成する建造物群は、雨水槽として機能していた可能性は高いと推測される。ibid,pp.181-184.

53 さらにコルテスは、グラン・シカルコリウキを構成する建造物28と建造物32の屋上部分に見られる階段状の装飾は、2つのパネルの神殿の上部に描かれたモチーフと類似していることにも言及している。ibid,p.178.

54 プルケの神オメトチトリの神話については、Spence,Lewis,*The God of Mexico*, T.Fisher Unwin LTD,London,1923,pp.286-287を参照した。

55 Melgarejo,op.cit.pp.158-160.

56 Melgalejo,op.cit.p.160.